

夜間の超高層ビル街における建物間通路の着座行動に関する研究  
 —大手町地区における屋外滞留空間の実測分析—

都市空間生成研究室  
 2241093 長生 祐樹

着座行動 夜間利用 建物間通路  
 超高層ビル街 通行量 前方環境

1. 研究の背景と目的

近年、都心部では再開発の進展に伴い、超高層ビルが集積する地区において、建物間通路や公開性をもつ屋外空間が数多く整備されてきた。これらの空間は通行空間として利用される一方で、滞留や着座といった行動が発生する場ともなっている。しかし、超高層ビル街における建物間通路については、人がどのような空間条件のもとで着座行動を選択しているのかは、十分に整理されているとは言い難い。

夜間は自然光の影響が少なく、人工照明によって空間環境が形成されるため、環境条件のばらつきを抑えて着座行動と空間条件との関係を把握しやすい時間帯である。

そこで本研究では、夜間の超高層ビル街における建物間通路を対象として実測調査を行い、着座行動の発生実態と、ベンチの向きや通行量、前方環境、座面照度といった空間条件との関係を明らかにすることを目的とする。これにより、夜間の屋外通路空間における着座行動の空間的特性を整理し、今後の建物間通路や公開性をもつ屋外空間の計画に資する知見を得ることを目指す。

2. 研究の方法

本研究では、東京都千代田区大手町地区に立地する、①東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路および②大手町仲通りの2箇所を調査対象地として設定した。両地点はいずれも超高層ビルに囲まれた屋外通路空間で、一般利用者が自由に通行可能であり、ベンチが設置されている。また、夜間において動線が明確で、通行と滞留が混在する特徴を有している。



図 1. 調査対象地の位置図

現地調査は日没後の時間帯に実施し、30分単位で通行量および着座行動の観察・記録を行った。着座行動については、ベンチ等に身体を預けて座る行為を対象とし、着座位置、人数、ベンチの向き、座面照度を1人単位で記録した。

また、照度計を用いて各ベンチの座面照度を実測するとともに、対象地全体については2mグリッドで床面照度を測定し、照度分布を面的に把握した。

さらに本研究では、夜間において通行者数が多く、駅方向へ向かう通行の流れを「主要通行方向」、それと反対側の向きを「非主要通行方向」と定義した。ベンチの向きは、主要通行方向、非主要通行方向、ならびに周辺空間の構成に応じた方向区分に分類した。通行量についても同時に記録することで、通行の主要な流れとの関係を踏まえた着座行動の選択傾向を分析した。

3. 調査結果

調査の結果、夜間の建物間通路における着座行動は、通路内の特定の位置に集中して発生するものではなく、調査地点ごとに異なる特徴を示すことが確認された。

まず、各調査地点における着座行動の発生位置を把握するため、着座が確認された位置を平面図上にプロットした。

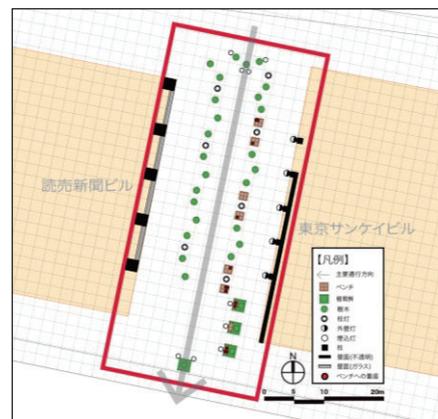


図 2. 東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路における着座行動のプロット図

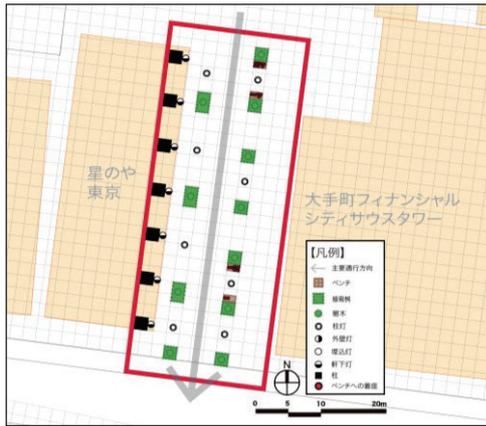


図 3. 大手町仲通りにおける着座行動のプロット図

東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路では、着座行動は通路内の複数箇所に分散しており、通路の端部や中央部といった位置条件による明確な偏りは確認されなかった。一方、大手町仲通りでは、着座位置そのものよりも、着座時の向きに特徴が見られた。

そこで、ベンチの向きを分類し、向き別に着座件数を集計した。

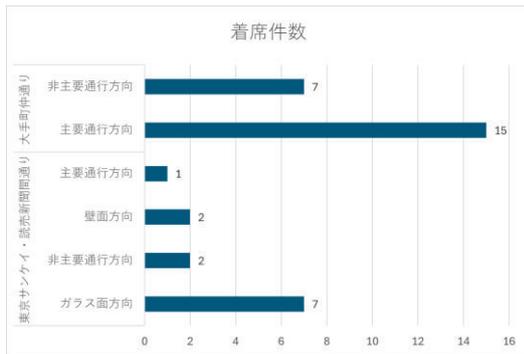


図 4. 向き別にみた着座件数

その結果、東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路では、ガラス面方向を向いたベンチにおいて着座件数が多く確認された。一方、大手町仲通りでは、主要通行方向を向いたベンチにおいて着座が多く見られた。

次に、通行量との関係を把握するため、時間帯別平均通行量を整理した。

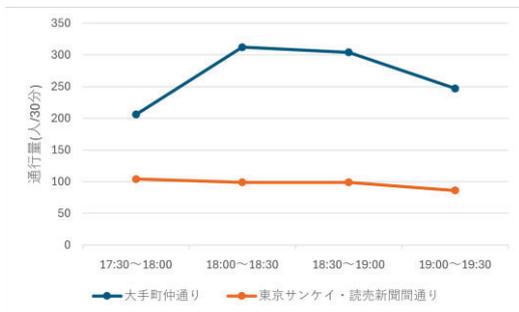


図 5. 時間帯別平均通行量

通行量の記録結果から、大手町仲通りは東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路と比較して、夜間においても通行量が多いことが確認された。大手町仲通りでは、駅へ向かう通勤者を中心とした通行の流れが明確であり、その通行方向を向いたベンチに着座が多く見られた。

一方、通行量が比較的少ない東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路では、通行動線との関係よりも、建物内部の明るさや人の気配が感じられる前方環境が重視され、ガラス面方向を向いた着座が選択されやすい傾向が確認された。この通路では通行量が少ないため、通行を避ける必要性が小さく、適度に人の気配が感じられる方向が選択されている可能性が考えられる。

なお、座面照度については、低い照度帯において着座がやや多く確認されたものの、その差は顕著ではなく、照度の高低と着座行動との間に明確な対応関係は認められなかった。このことから、照度は着座行動を単独で規定する要因ではなく、前方環境や通行状況と組み合わせることで作用する補助的要因である可能性が示唆される。

#### 4. 結論

本研究では、夜間の超高層ビル街における建物間通路を対象に、着座行動の発生実態を実測調査に基づいて分析した。その結果、夜間の屋外通路空間における着座行動は、通路内の位置や座面照度といった単一要素によって一義的に決定されるものではなく、ベンチの向きや前方環境が重要な要因であることが明らかとなった。

通行量の多い大手町仲通りでは通行の流れに対する視線方向が着座行動に影響し、通行量の少ない東京サンケイビル・読売新聞ビル間通路では、建物内部の明るさや人の気配が感じられる前方環境が着座行動の選択に関係していると考えられる。

以上より、夜間という時間帯は、通行量や光環境の条件が相対的に整理され、着座行動と空間条件との関係を実測的に把握しやすい時間帯であるといえる。夜間の建物間通路における着座行動は、照度そのものよりも、通行の流れや着座時の視線方向を含む前方環境と密接に関係していることが明らかとなった。

本研究は、業務地における屋外滞留空間の計画において、着座配置に加え、通行の流れや着座時の向きを含めた前方環境を考慮することの重要性を示すものである。

#### 参考文献

- 鈴木毅・船越徹 (1993) 「都市屋外空間における滞留行動と空間構成に関する研究」、『日本建築学会計画系論文報告集』、第 448 号、pp. 47-56
- 小林茂雄 (2001) 「夜間街路における照明環境が心理評価に与える影響」、『日本建築学会計画系論文集』、第 539 号、pp. 73-78
- 大影佳史・讚井純一郎 (2006) 「街路空間における滞留行動と視覚的環境の関係」、『日本建築学会計画系論文集』、第 605 号、pp. 61-68